東洋史研究

第二十二巻 第四號 昭和三十九年三月發行

カラクラの生涯

若松寛

はじめに

清朝と北アジアの覇權を爭ったズンガル Jūn ɣar〈Jegün ɣar（準噶爾）王國の史的研究は、從來その史料的制約により、主としてガルダン（噶爾丹）登場以後に限られている。本稿は、その缺を補うために、ズンガル王國を歷史に登場させたガルダンの祖父カラクラ Qara qula（哈喇忽喇、哈爾呼喇）の生涯に焦點をあて、この時期のズンガル王國史の一端を明かにして、將來の研究に備えたい。

カラクラについて、古くパルラス Pallas は、

ハラフラ Charachulla なる異名を持つフトゥガイトゥ Chutugaitu は、モンゴルのハーンに對する以前の服從貢納義務からカルムック人 Kalmucken を完全に解放し、獨立させた諸首長 Fürsten の一人であった。(1)

とのべ、明代中期に驍名をはせたエセン Esen（也先）の死後、四散したカルムック（＝ドゥルベン・オイラット Dörben oyirad 四衞拉特）が、その後の永い空白をへて、ズンガル部のカ（ハ）ラク（フ）ラに至って復興をとげたことを傳えている。

さらにまたパルラスは、

Charachulla の長子バートゥル・タイジ Baatur Taidshi は、すでに一六一六年に父から分れて、イルティシュ Irtisch に居住していた。そしてそこでかれはしだいに強力になり、當時カルムックに多かった小首長らを從屬させ、一六三四年に二度目のブハーラ Buchara 攻撃での幸運によって豐かになった。一六三五年の父 Charachulla の死後、かれはダライ・ラマからフンタイジ Chuntaidshi としての特許 Patent とエルデニ・バートル Erdeni Baatur の稱號を得た。[2]

とのべ、その子バートゥル・タイジ Baatur Taidshi（Baratur tayiji（巴圖爾台吉）に至って、カルムックにおけるズンガル部の覇權の基礎がおかれたことをのべている。

ところが、これまでカラクラが實在の人物であったかどうかについて疑問をもつ學者があり、むしろ否定的な意見が強かった。しかし、これが漢文に通じないハワース H. Howorth[3] の誤解に發する意見にすぎないことは、かつて矢野仁一博士によって、[4] また近年護雅夫博士によってもっとも明快に論證された通りである。[5]

さらにまた最近モスクワから出版された Материалы по Истории Русско-Монгольских Отношений 1607—1636, Москва, 1959.（略稱 МИРМО）は、表題のように、一六〇七年から一六三六年にいたる間のロシアとモンゴルの交涉史料集であり、この時期に屬する計一三五通にのぼるモスクワ中央政府と地方軍政官 воевода の往復文書、あるいはロシアとモンゴル、カルム(マ)ック間の往復文書等の "記錄文書"（Архивные документы）が收錄されている。それらはいずれも當時の生々しい記錄である。それら文書の中に、カラクラ、バートゥルらの活動を傳えたものもあり、兩者の父子關係の事實はロシア文書によってもはや動かしがたい。

卽ち一六三五年三月三〇日附のカラクラの宿敵アルツン・カーンの側近ダイン・メルゲン・ランズ Дайн Мерген-лангзがロシア皇帝に宛てた書簡に（文書一一五號。以下 МИРМО 所收の文書は單に док. No. 115 の如く表記する。）、

アルツン・ツァーリ Алтын-царь（царь＝Mo. qān）は、黑カルマック черные калмаки[6] と七年間戰った。わたしは

アルツン・ツァーリとカラクラ Kaparypa の子コンタイシャ Kонтайша を永遠に和睦させた。

とあり、Kaparyла が Charachulla 哈爾呼喇、哈喇忽喇 △Qara qula に、その子 Kонтайша が Baatur Chuntaidshi △Baratur qong tayiji 巴圖爾渾台吉であることは何らの疑いもない。

本稿は以下 MMPMO 所收のロシア文書を主材料にして、カラクラの生涯を明かにするのが目的であるが、その前に、カラクラ登場の時期までに、カルムックが北西モンゴリアにおいていかなる政治情勢におかれていたか簡單にふれておきたい。

一

一四五四年（景泰五）、エセンが殺されると、瓦剌（衛拉特）部は四散し、モンゴリアは混亂に陷ったが、まもなく韃靼部がはなばなしい復興をとげて、この混亂に終止符をうった。

一方その後の瓦剌部はどうなったのか、特にその住牧地がどこにあったのか。これらの點について明側の史料はほとんど沈默を守っているが、蒙古源流は、

エセン・カガンの死を聞いて、タイスン・カガン Tayisung qaran（岱聰汗）の若夫人サムル・タイゴ Samur tayiro（薩睦爾太后）は、七歳になるその子メルギュルキス Mergürkis(麥兒苦兒吉思)を伴い、クンゲイ・ジャブカン Könggei jabqan（庫奎・扎巴哈）にドゥルベン・オイラット Dörben oyirad（四衛喇特）を攻め、大いに俘獲を得て歸った。(7)

とのべ、エセンの死後、ただちに韃靼部は瓦剌部をクンゲイ・ジャブカン地方に攻め、大勝を收めたことを傳えている。クンゲイ・ジャブカンとは、和田清博士の推定されるように、「今の烏里雅蘇臺（Uliyasutai）の西、西北蒙古の阿雅爾諾爾（Ayar Naghur）に注ぐ坤桂（Künggei）・札布汗（Jabkhan）兩河の流域地方」(8)であると考えられる。

さらに時代を降って、一六世紀中葉、內モンゴリアのトゥメト Tümed（土默特）部長アルタン汗のドゥルベン・オイ

ラット遠征について、蒙古源流に、

アルタン・カガン Altan qaγan（阿勒坦汗）は、御歳四七、壬子の年（一五五二、嘉靖三一）、ドゥルベン・オイラットに行兵し、クンゲイ・ジャブカンにてナイマン・ミンガン・コイット Naiman mingγan qoyid（奈曼明安輝特）の長マニ・ミンガトゥ Mani mingγatu（瑪尼明噶圖）を殺し、妻ジゲケン・アガ Jigeken aγa、二子トコイ Toqoi、ビュゲグュテル Büggegüter をはじめ、全人衆を屈服させ、かくしてコニン Qoning を占領し、ドゥルベン・オイラットを降した。[9]

とあり、ドゥルベン・オイラットは依然としてその根據地をクンゲイ・ジャブカン地方に置いていたと考えられる。コニンは和田博士によれば、和寧、卽ち喀喇和林である。喀喇和林がアルタン汗に占領されたことは、永樂年間に外蒙古が瓦剌に占領されて後、ここに到って韃靼部の外蒙古經略が成功したものと考えられよう。[10]

ついでアルタン汗の曾孫クトゥクトゥ・セチェン・コンタイジ Qutuγtu seċen qong tayiji（庫圖克圖徹辰鴻台吉）は壬戌の年（一五六二、嘉靖四一）、ドゥルベン・オイラットに進軍し、エルチス Erčis（額爾濟斯）河にトルグート Torraγud〉Torγud（土爾扈特）を破ったという。[11] エルチス河はもちろんイルティシュ Иртыш 河に外ならない。

ついで亦甲戌の年（一五七四、萬曆二）、アルタン汗の一族ブヤン・バガトゥル・コンタイシ Buyan baratur qong tayiji（布延巴圖爾洪台吉）兄弟はドゥルベン・オイラットを攻め、カルガイ Qarrai（哈爾該）の南にて、エセルベイ・キャ Eselbei kiy-a（額色勒貝侍衛）をはじめとするナイマン・ミンガン・コイット Naiman mingγan qoyid（八千輝特）を降し、別軍はさらにジャラマン・カン Jalaman qan（濟拉瑪汗）山陰にてバガトゥト Baratud（巴圖特）を討ち、さらに追跡三月にして、トゥバカン・カン Tubaqan qan（圖巴罕汗）山陽にチョロス Ċoros（綽羅斯）をはじめ、ドゥルベート・オトク Dörbed otoγ を討って歸ったことが傳えられている。[12]

和田博士の研究によれば、カルガイ山は杭愛山に、トゥバカン・カン山は唐努・土播の土播汗山に比定されている。[13] ジ

ャラマン・カン山の位置は不明だが、或はクンゲイ・ジャブカン地方にあったものかと推定される。和田博士は右の記事にみえるナイマン・ミンガン・コイット（奈曼明安輝特＝八千輝特）を輝特の一部分のようにみておられるが、[64] シラ・トゥージ Sira turuji に、コイット Qoyid の系譜をのべた條があり、そこに、

スタイ・ミンガトゥ Sutai mingratu。その子エセルベイ・キャ Eselbei kiy-a。[65]

とあり、この系譜は、蒙古源流の傳える Sutai mingratu（索岱明安圖）・Eselbei kiy-a（額色勒貝侍衛）父子と全く一致するから、ナイマン・ミンガン・コイット（八千輝特）はコイット（輝特）そのものと考えなければならない。[67]

以上の如く、ドゥルベン・オイラットはエセンの死後、一貫してクンゲイ・ジャブカン地方に住牧し、明末アルタン汗とその一族の攻撃を蒙った頃には、その住牧地はクンゲイ・ジャブカン地方を中心に、東は杭愛山陽に、西はイルティシュ水源地方に、北は唐努・土播地方に及んでいたと考えられる。

ドゥルベン・オイラットがアルタン汗の攻撃によって外蒙古を失った結果、必然的にこの地域における外蒙古族の勃興を促したであろう。この間の事情を傳えるのが次のパルラスの記事である。

ハラフラの幼年時代、また従って大體一七世紀の初頭において、同盟せるオイラット諸族―それらの世襲的諸首長は全て未だ年少で、モンゴル人はつねにかれらの上に自己の支配權を維持しようと努めていた―はモンゴルの Laicher Chan（カルムック人はかく呼ぶ）との數度の戰いに於て幸運に惠まれず、ついにその支配權を承認し、多少ともそれに從屬せざるをえなくなった。[68]

文中のモンゴルの Laicher Chan とカルムックとの戰いについては、カルムック傳承の「ウバシ・コンタイジ傳 Mongrolin ubasi qon tayijiin turuji」に、

モンゴルのサイン・ライカル・カーン Mongroliin sayin layiqar qān とドゥルベン・オイラット Dörbön oyirad の良侯達 sayin noyad 兩者は、エーメリン・アダク・シャラ・コルスン Emeliin adar šara qolsun で戰い、和平した。[69]

とあって、パルラスの記事を裏づけている。Sayin layiqar qān は、シラ・トゥージによれば、

ライコル・カガン Layiqor qaran は壬戌 usun noqai の年に生れた。

とあり、壬戌の年は一五六二年（嘉靖四一）とみられる。[3] ライコル・カガンは欽定外藩蒙古回部王公表傳（國朝耆獻類徵初編卷首所收）卷六一傳四五喀爾喀扎薩克圖汗部總傳にみえる賽瑚爾汗であり、表傳同條によれば、

初賽瑚爾爲喀爾喀右翼長。所部以汗稱。傳子素巴第。始號扎薩克圖汗。

とあり、喀爾喀右翼長の地位にあった。喀爾喀右翼の牧地は、なお表傳同條に、

元太祖十六世孫格呼森扎扎賚爾琿台吉有子七。分掌喀爾喀左右翼。左翼徙牧圖拉河界。右翼仍留居杭愛山。

とあり、杭愛山にあったという。とすれば、ドゥルベン・オイラットはアルタン汗の時代に有していた杭愛山陽の地を賽瑚爾汗に奪われてしまったとみなければならない。賽瑚爾汗とドゥルベン・オイラットの和平の時期について、ウバシ・コンタイジ傳には明かでないが、パルラスによれば數度の戰いの結果であったという。兩者の戰いにつぐ和平の時期は、賽瑚爾汗の生年、内モンゴル族のドゥルベン・オイラット攻撃の時期などから考えて、やはりパルラスのいうように、一七世紀初頭とみておくのが妥當と考えられる。和平の結果、ドゥルベン・オイラットが扎薩克圖汗部に服從・貢納義務を負ったことは後述する通りである。

この敗北の結果、ドゥルベン・オイラットはクンゲイ・ジャブカン地方を捨て、遠くイルティシュ上流域へと移牧することになるが、移牧の原因は、右の如き數度の戰いの敗北の結果惹起されたことは疑ないが、ドゥルベン・オイラットをさらにイルティシュ下流へと追いやったのは、宗主扎薩克圖汗に名目上從うにすぎなかったといわれるアルツン・カーンの壓迫であった。以下のべるカラクラの生涯は實にこのアルツン・カーンの壓迫からドゥルベン・オイラットを解放する事業に費されたのである。

二

カラクラがロシア文書にはじめて姿をみせるのは、一六一九年（萬曆四七）のことである。今世紀に入って、ロシア政府はシベリアを横斷して、遠く中國に達する通商路開拓の必要を感じはじめていた。再度の探査の失敗を繰返した後[32]、一六一八年五月にトムスク Томск を出發したイワン・ペトリン Иван Петлин 一行が北京に到達した一七世紀最初のロシア使節となった。使節行の結果は、中國に達するには意外に困難の伴うことが判明しただけだった（см. док. No. 34, 37, 38, 39）。ペトリン一行が北京よりの歸途、翌一九年、當時ウプサ・ノール Упса озеро ／Ubsa narur に本營をおいていたアルツン・カーンのもとに立寄ったさい、カーンは一行とともに自らの使者タルカン・ラバ Тархан-лаба ／Darqan blama をロシアに派遣し、次のような内容の信書をツァーに宛てている。

わたし（＝アルツン・カーン）の願いは、われらと汝らの間に使節が往來し、わが商人は汝の國に、汝らの商人はわが方へと通路が開けていることであった。われらの間のこの友好關係をカルムックのカラクラ・タイシャ калмыцкий Каракула-тайша が妨げている。しかしかれらカルムックは多勢ではない。もし大帝がトムスク、トボリスク Тобольск、タラ Тара の全兵士にわが兵と共に、これら惡人共 воры、卽ちカラクラ・タイシャとその民を攻擊するよう命じられるなら、汝の兵は汝の側から、わたしはわが側からかれに兵を出し、われらの間に惡人共がいなくなり、通路が妨げられないようにしよう（док. No. 33）。

ここに初めてカラクラ・タイシャ Каракула-тайша[33] がアルツン Алтын ／turk. Altın＝金・カーンの敵として歷史に登場する。アルツン・カーンについては、すでに先人の研究があり[34]、詳細はそれにゆずるが、このときのアルツン・カーンは初代のショーロイ・ウバシ・コンタイジ Soloi ubasi qong tayiji（碩壘烏巴什渾台吉）であり、シラ・トゥージ Sira turuji によれば、丁卯 ral taulai の年（一五六七、隆慶一）の生れである[35]。欽定外藩蒙古回部王公表傳卷六三傳四七

扎薩克多羅貝勒根敦列傳によれば、碩壘は和托輝特部長であったことがみえ、同部について、表傳同條に、

蓋和托輝特爲喀爾喀極邊。西近厄魯特。北近俄羅斯。俗喜鬪。烏梁海復錯處其間。捕貂射獵。依木而居。納賦和扎(ママ)輝特。有事則籍之爲兵。故和託(ママ)輝特。雖隸扎薩克圖汗。實自爲一部。

とみえ、和托輝特は喀爾喀の極邊に位置し、事實上獨立をなす勢力にあったといわれる。この和托輝特の名は、ロシア文書には全くみられず、アルツン・カーンの領地は、

Монгольские земли, Могальская земля, Могольское государство, Мунгалы, Монголя.

などの字面で示されている。земля（地）、государство（國）の字を別にすれば、いずれも mo. Mongrol から派生したものであることは明かであろう。カーンの本營が、喀爾喀の極邊ともいうべきウプサ・ノールにあったことは、一六一六年、カーンに會見したロシア使節イワン・ペトロフ Иван Петров の詳細な報告によってしることができる。[68] また烏梁海の和托輝特に納賦云々の表傳の記事は、一六三四年、アルツン・カーンの本營を訪ねたロシア使節ヤコブ・トゥハチェフスキー Яков Тухачевский の報告に、

アルツン・ツァーリとウルンカンの地 Урункан земля とは仲が睦じい в совете。（док. No. 18）

とみえる Урункан は烏梁海をさすものと考えられるから、その信憑性は十分考えられる。

次にふれておかなければならないのは、すでに引用したパルラスのいう「ハラフラの子バートゥル・タイジは、すでに一六一六年に父から分れてイルティシュ河に居住していた。」という記事についてである。この記事は、おそらくパルラスが一六一六年にバートゥルの本營に派遣されたロシア使節トミロ・ペトロフ Томило Петров とイワン・クニチン Иван Кунищын の報告に基づいたものであろう。わたしもこの報告に基づいて、もう少し詳しくバートゥルの置かれた政治的立場について考えてみたい。

ペトロフらは一六一六年晩春、トボリスクよりイルティシュ河を溯って行くこと二月で、大タイシャ、ボガティリ・タ

ライ・タイシャ Большой тайша Богатырь Талай-тайша の本營に到着した（док. No. 18）。このボガティリがバートゥル・タイジであることはいうまでもない。大タイシャは、西域圖志卷二九官制一、附準噶爾部舊官制に、

準噶爾全境。分四衛拉特。各有首領以雄據之。尊其名曰大台吉。猶前代諸蕃部主之號也。

とある大台吉を意味するものであろう。バートゥルが一六一六年にすでに父から獨立していたことはこの名稱を有することによっても確認されよう。さらにペトロフらによれば、

全カルマックの筆頭の начальный タイシャはこのバ（＝ボ）ガティリ・タライ・タイシャである。（док. No. 18）

とみられているが、果してそこまでみていいか問題がある。なぜなら、バートゥルの父カラクラがすでに記したように、西北モンゴリアに雄視するアルツン・カーンを脅かすに足る勢力を持っている事實があるからである。父カラクラのこのような實力をおいて、その子バートゥルがカルムック第一の實力者であったとはいえないであろう。ペトロフらの報告によっては、バートゥルの本營の位置ははっきりしないが、それがイルティシュ河の東岸、いまのセミパラチンスクに近い一七世紀を通じて鹽の產出地として名高いヤムシ湖 Ямыш озеро 周邊にあったことはロシア文書によって明かである。[49] バートゥルは地理的位置によって、もっとも當時のロシア人に知られた存在であったから、西北モンゴリアの情勢に暗いペトロフら、いやそれが當時のロシア人の知識の全てであっただろうが、によってこのように傳えられたのも無理はない。

バートゥルの本營でのペトロフらの見聞によれば、

いまカザック大オルダ Казачья Большая орда とキルギズ・オルダ Киргизская орда はカルマックに臣從し、カルマックはこの兩オルダよりも強力である。（док. No. 18）

といい、また

カルマック人はナガイ Нагай 人を毎年殺している。（ibid）

とあり、バートゥルはカザック（哈薩克）、キルギズ（乞兒吉思）を服從させ、またナガイを毎年攻めていたという。しかし、これも文字通りには信じられない。まずキルギズは當時アバカン Абакан 河流域に住牧し、東はアルツン・カーンにより、西はカルムックによって挾まれ、兩者の侵蝕するがままにまかされていたものである。バートゥルが服從させたキルギズはその中の一部分にすぎなかったことは、さきのアルツン・カーンの使者タルカン・ラバに託されたツァーの返書において、カーンがキルギズからヤサク ясак（毛皮稅）を徵收していることに對するツァーの非難のことばから推察される（док. No. 43）。カザックとナガイがカルムックの敵であったことは、すでに一六〇六年に、カルムック使節がタラに來て、ツァーにこの兩敵からの守護を歎願している事實からも伺える（док. No. 2）。カザックに對しては、なお翌七年、カルムック使節がタラに來て、再度カザックからの守護をツァーに歎願し、加えて、はじめてアルツン・カーンの名をあげ、その攻擊からの守護を求めている（док. No. 3）。また九年三月三一日、トムスクに來歸したテレウート部長アバク公 Абак-князь のもたらした情報によれば、カルムックはアルツン・カーン及びカザックと戰って敗走したことが傳えられている（док. No. 7）。さらにまた九年七月二〇日、カルムックより歸還したロシア使節 パスペルコ・ゴルービン Поспелко Голубин に對して、カルムックが三度アルツン・カーンとカザックに對するツァーの援助を歎願している（док. No. 10）ことによって、一六一六年までにバートゥルらカルムックはアルツン・カーン及びカザックに對して激しい戰鬪を繰返し、ひとまずカザックに對しては小康を保つことができた程度と考えられる。しかもアルツン・カーンに對しては失敗だったようにみられる。というのは、ペトロフらの報告によれば、ペトロフらは、バートゥルの本營において、アルツン・カーンの臣下と中國人達 китайские люди に會い、かれらはヤサクをとりにやって來たと傳えているからである（док. No. 18）。もつとも中國人については、ペトロフらが中國人に直接尋ねた所によれば、

アルツン・カーンと中國は宗教と讀書きと言語は同一である（ibid）。

と聞いていることから、この場合の中國人とは、いわゆる中國人ではなく、おそらくアルツン・カーンの宗主、扎薩克圖

汗部の人間を意味するものではあるまいかと思う。[36]

いずれにしても、バートゥルが一六一六年に父から獨立していたことは事實であるが、アルツン・カーンとその宗主扎薩克圖汗に對しては服從・貢納の義務を負つていたことは明かである。おそらく父カラクラも同樣の運命を免れ得たとは思われないが、その後間もなく一六一九年にカラクラがアルツン・カーンを脅かす勢力にあったことはすでにのべた通りなので、このわずかの間に少くともカラクラは自らをアルツン・カーンの桎梏から解放するだけの働きをしたものと考えざるをえない。この解放が束の間にすぎなかったことは次にのべなければならない。

三

さて一六一九年、アルツン・カーンの派遣したタルカン・ラバはイワン・ペトリンに伴われて同年五月一六日、トムスクに到着し（док. No. 37）、さらにラバは翌二〇年一月一〇日、モスクワに來り、同月二九日、ツァーリ、ミハイル・フョードロヴィチ Михаил Федорович の接見を得て、使節行の目的をのべている（док. No. 41）。一方、事態の緊迫化を覺ったカラクラもただちにモスクワに使者を派遣し、

子弟、一族と全ウルス улусы∧mo. ulus をあげて、大帝の御手の下に入らせ賜わんことを。

と歎願した。[37] モンゴル、カルムック兩使節の請願を受けたツァーは處置にきわめて愼重であったことはもちろんである。結局ツァーは、モンゴリア問題不干渉の立場を守ることにした。當時のロシア政府としては對ポーランド問題の方がはるかに重要であったからであろう。中國への通商路開拓の課題は忘れられたわけではないが、意外に中國への道は遠くて、且困難であることはすでに理解ずみである。この課題は西北モンゴリアに統一政權が生れるまで事實上不可能に等しいことも理解していたからであろう。一六二〇年、歸還するタルカン・ラバに同行したロシア使節に持たせたツァーの返書は、カーンがキルギズからヤサクを取っていることを強く非難し、[38] もしカーンが「大帝の御手の下に入る быти по

царского величества высокого руκого」場合にのみ共同してカーンの敵に當ることがのべられているにすぎなかった。[31]

カラクラの場合も同様で、カラクラが「大帝の御手の下に入る」場合にのみ請願は聽許されることがのべられているにすぎない。[32] アルツン・カーンの使者タルカン・ラバがモスクワを去るとまもなく、モスクワ政府はトボリスク軍政官に訓令を宛て、

アルツン・ツァーリと中國 Китайское государство とムガール國 Могальское государство（＝アルツン・カーン領）は遠い。そしてそれらの國からわが國に商人を通わせるには遠い。それにアルツン・ツァーリの遊牧民は好戰的である войнские。[33]

ことを理由に、ロシアとモンゴル、さらには中國との一切の交涉を斷絕することを嚴命している。カルムックに對しても事情は同樣である。ロシア政府は一六二三年一〇月三〇日附のトボリスク軍政官宛の訓令において、

カルマックは人多く、好戰的である。かれらをモスクワへ通してはならない。（док. No. 68）

と命じ、從來のモンゴル、中國（扎薩克圖汗部）に加えて、ここにカルムックとの交涉斷絕を嚴命している。ロシア政府は、來るべきアルツン・カーンとカラクラの決戰に備えて、自らの門戶を固くして、受ける被害を未然にくい止めようとしたのであろう。[34]

かくしてアルツン・カーンとカラクラの爭いは一六二〇年から翌年にかけて行われ、結果はカラクラの慘敗に終った。この戰いに祕かな關心をよせていたロシア政府はトムスクよりテレウート Телеут 部長アバク公 Абак-князь のもとへコサック、トヤン Тоян なる者を派遣し、情報收集に當らせた。二一年八月、歸還したかれの報告によれば、

全タイシャ、卽ちトイラ Тойла とクラガライ Кураγалай とメルゲン・タイシャ Мерген-тайша と他の全てのタイシャら、及び黑カルマック人は、皆オビ河にやって來た。……原文缺……チュムシュ河口 устье реки Чюмыша に堡壘

городок を築いた。……原文缺……オビ河とトミ河 Томь река の間、トムスク市とクズネッツク城塞村 Кузнецкий остроr[83] の間に遊牧するつもりである。かれらがオビ河に集り、堡壘を築いたのは、かれらをアルツン・ツァーリが破り、カラクラ Карагула から妻子を奪ったからだ。(док. No. 56)

と傳えられ、カラクラ Карагула／Qara qula は妻子を奪われるほどの敗北をなめ、逃亡してオビ河の支流チュムシュ河口に據ったという。この戰闘の詳細は、カラクラの子チョクル чокур／Cükür（楚庫爾）[84] のもとに派遣されたブハーラ人ムクタル Мухтар のもたらした情報によれば、次のように傳えられている。

ムクタルはカルマックのタイシャ、チョクルとの對話にて次のように聞いた。

カルマックのタイシャ、カラクラ Каракула はアルツン・ツァーリの攻撃に赴いた。その數四千。アルツン・ツァーリの本營 улус を攻め、多くの捕虜を奪って歸った。そこでアルツン・ツァーリはこれを取押えるために、カラクラ・タイシャに四千の兵を差向け、背後から三千人を差向けた。そしてカラクラ・タイシャの民を皆殺しにした。わずかにカラクラ・タイシャは子供をつれて逃れた。そこでわれらカルマックは皆イティク Итык 山に沿い、カムイシュロフ Камышлов 河に沿って、トゥメニ Тюмень から一〇日行程の地に遊牧しているのだ。(док. No. 62)

右の報告によれば、カラクラは四千の兵を率いてアルツン・カーンの本營に果敢な攻撃をかけ、一度は勝利を得たものの、預勢をたて直したカーンのために、前後より二倍の敵に圍まれ、大敗北を喫し、チュムシュ河口に避難したことになる。カラクラが攻めたアルツン・カーンの本營がウプサ・ノールに置かれていたことはすでに明かにした。敗れたカラクラはウプサ・ノールを遠く去って、オビ河の支流チュムシュ河口に避難し、ここに堡壘を築いて據り、再起をはかったのである。カラクラ軍の移動して據った範圍は、ロシア文書によって、オビ河とトミ河間の地方、ロシア軍の守備範圍からいえば、トムスク市とクズネッツク城塞村に影響を及ぼす範圍にまであったわけである。カラクラのこれまでの住牧地はロシア文書によってもはっきりしないが、おそらくそれは、南及び東はイルティシュ河の水源から直接アルツン・カーン

領、卽ちモンゴル國に接する地方まで、西はイルティシュ河の東岸まで、北はチュムシュ河に及ぶ範圍にあったものと考えられる。カラクラの住牧地に接して、一六一六年にすでに父から獨立していたバートゥル・タイジはイルティシュ河を下ってヤムシ湖周邊に根據し、カラクラの勢力範圍の中の西北方面の守りにつき、ロシア側にはイルティシュ流域地方最强のタイシャとして知られていたのであろう。敗れたカラクラは、アルツン・カーンの本營を去って、遠く北に向い、オビ河とトミ河間の地方に移動せざるをえなかったのである。

次にこの決戰の時期とバートゥル・タイジの役割を考えてみたい。決戰が一六二〇年五月以前になかったことは、ツァーのアルツン・カーン、及びカラクラ宛の勅書の日附からしられよう。[37] しかし一〇月までには行われている。卽ち二〇年一〇月一〇日、カルムックからウファ Уфа に逃亡してきたバシュキール人ら Башкирцы の報告に、

カルマックのタイシャらにカザック・オルダのイシム・ツァーリ Ишим-царь からの壓迫は大きい。イシムはカルマックを多數殺した。アルツン・ファーリの民もかれらを多數殺した。そしてウルスを率いた二人のタイシャが妻子と共に捕虜になった。(док. No. 48)

と傳えているからである。カラクラ軍は二〇年一〇月までにアルツン・カーンに敗れて、翌二一年八月、ロシア使節がテレウート部長アバク公から情報を得た時までにチュムシュ河口に移動していたわけである。[38]

このバシュキール人らの報告によれば、カルムックはアルツン・カーンの攻擊に加えて、カザックのイシム・ツァーリの激しい壓迫を受けていたという。カザック・ツァーリ、イシムは、カザック大オルダの君長エシム Есим 汗(一五九八―一六三五?)のことである。[39] 一六一六年にバートゥルの本營を訪ねたロシア使節は、バートゥルがカザックを押えて、カルムックはカザックよりも强力であったとのべていたが(參照、九頁)、二〇年にはカザックは逆にカルムックを壓迫する勢力にあったことになる。二〇年九月にバートゥルの使者ブガ Буга<mo. Buqa ら五人がトボリスクに來り、シベリアのロシア領內へ移牧する許可を求め、さらに次のようにのべている。

バートゥル・タイシャ Багатырь-тайша 自身は、トボリスクから一月行程のイティク山 Итиковы горы に遊牧している。他の多くのタイシャらもカルマック人をつれてツァーの領地たるシベリアの町に移牧した。そしていまイシム Ишим 河とトボル Тобол 河間に遊牧している。カルマックのタイシャらが汝が國王のシベリアの町近くに移牧したのは、アルツン・ツァーリとカザック・オルダがカルマックのタイシャらを攻撃しているからだ。(док. No. 47)

イティク山の位置ははっきりしないが、おそらくイシム河の下流に沿った地にあったとおもわれる。バートゥルはこの時トボリスクから一月行程のこの地へ、つまり嘗ての根據地ヤムシ湖周邊からはるかに北東へと移動せざるをえなかった。[43] 移動をよぎなくさせたのは、アルツン・カーンからの敗北とカザックの壓迫のためであった。バートゥルが父カラクラに加ってアルツン・カーンと戰ったことは全くロシア文書に見えないが、バートゥルの地位、實力からみて、この戰いに加わらなかったとは考えられない。おそらくかれはこの戰いに敗れた後、アルツン・カーンの激しい壓迫を逃れて、故地ヤムシ湖よりはるか北東イティク山にまで逃れざるをえなかったのであろう。從ってバートゥルが父と共にアルツン・カーンの本營ウプサ・ノールを衝いた後、一轉して敗れてトボリスクから一月行程と稱される地方にまで逃れた事實から考えれば、その間の移動期間を考慮すると、カラクラ軍とアルツン・カーンとの決戰は二〇年五月のツァーのトボリスク軍政官宛の勅書が出されてまもなく行われたのではなかろうかと考えられる。バートゥルはこの後しばらくイティク山を根據地とすることになる。そしてこの地でモンゴルを避けつつ、西隣カザックに當らざるをえなかった。カザックはカルムックがアルツン・カーンの激しい攻撃に直面したのを機會に、この時とばかりカルムック攻撃に乘出したものと考えられる。そしてバートゥルはこれに耐えきれず、北の方シベリアの町へと移動せざるをえなくなったのであろう。もっとも、このカザックの攻撃が、アルツン・ツァーリと協定の上で行われたする報告があるが、俄に信じ難い。[44]

次に、カラクラと共に戰ったトイラ、メルゲン兩タイシャが誰だったか考えてみよう。

まずトイラ・タイシャであるが、これはアルツン・カーンとカラクラの決戰を傳えたもう一つの文書(док. No. 55)

によって、タライ・タイシャ Талай-тайша の訛傳であることは明かである。タライ・タイシャはデルベート Dörbed 首長ダライ・タイシ Dalai tayiši（達賴台什）[2]であろう。このことは、パルラスがデルベート Derbet/Dörbed 部の歴史をのべた中で、

デルベートは族祖 Stammfolge と呼ばれているダライ・タイシ Dalai Taidshi 迄は單なる群衆にすぎなかった。アルタイの南、ズンガルの東にてズンガルと友好的に暮らしていた。モンゴルとズンガルのカラクラとの戰いにおいてデルベートは損害を蒙り、ダライは臣下の大部分を失った。一六二一年迄この戰いに不幸な運命を共にした。そして殘った民と共にイシム Ischim とトボル Tobol の地に集った。[3]

とある Dalai Taidshi が Талай-тайша であることは自明である。ダライがアルツン・カーンとの戰いに敗れて、イシム河とトボル河間の地に逃げたことは、後のロシア側の記錄と一致している。

次にメルゲン・タイシャであるが、これも Лох. No. 55 によれば、その名は正確には、メルゲン・テメニ・タイシャ Мергеи-темень-тайша である。シラ・トゥージに、ドゥルベン・オイラットの系譜をのべた中に、

キ・メルゲン・テメネ Ki mergen temene はケレイット姓 Kereyid omor なり。[4]

とみえる Ki mergen temene と同一人物であろう。ケイレット姓、つまりトルグート部の大酋である。

この一六二〇年の戰いは、ズンガルのカラクラをはじめ、デルベート、トルグート首長自らが加ったカルムック軍がアルツン・カーンのために慘敗した一戰だったのである。敗れたカルムック軍の中、ある者はオビ河とトミ河間の地方に、あるものは遠くイシム河とトボル河間の地方に移牧せざるをえなかったのである。

四

さて「チュムシュ河口の堡壘で冬を越し、トムスク市とクズネッツク城塞村の間の地方に住牧するつもり」だったカラ

クラは、二一年春、すでにトムスク市とクズネッツク城塞村の近くに集結している。そしてトムスク市の近くからオビ河までの地方に住牧する正式の許可を求めるための使者をモスクワに派遣している。しかし使者は二一年末になっても歸還しなかった。[45] この間にロシア政府はトボリスク軍政官に訓令を宛て、トボリスクよりトムスクに二百人の火器を装備した增援隊を派遣することを命じている。[46]

翌二二年には、バートゥルの根據地であったヤムシ湖が完全にアルツン・カーンの手におちていたことが確認される。[47] こうした結果、ロシアの前進基地に接近したカルムックは、シベリア各地を混亂におとしいれざるをえなかった。[48] しかしこうしたことはいたずらにシベリア當局を刺激させるのみで、再起を期すカルムックにとって却って不利を招くばかりである。今、安じて遊牧できる地はシベリアにしか殘されていなかったからである。一六二三年四月、ウファ市からイティク山に移っていたバートゥル・タイジの本營に、バートゥルをはじめ、ウルリュク Урлюк<〔Qo〕 örlüg 〔和〕 鄂爾勒克、[49] バートゥルの弟バイバギシュ Байбагиш<Bayibaγas、[50] チョクル чокур<Čükür （楚庫爾） に會見するために派遣されたロシア使節ワシリー・ヴォルコフ Василий Волков の報告によれば、[51] その前年、二二年に、バートゥル、ウルリュクらはウファに使節を派遣し、ツァーの御手の下に入る用意があること、ウフィンスク郡のバシュキール人の村落を攻撃するようなことはしないことを申出ている。この申出に對する回答を携えてヴォルコフはイティク山に來たのであったが、ヴォルコフに會ったカルムックのマンギット・タイシャ Мангит-тайша[52] の話によれば、

タライ Талай （=Богатырь） は今、ウルスにいない。ムガールのアルツン・ツァーリと戰うために出かけてしまった。[53]

とあり、バートゥルは五月にはすでにアルツン・カーンと一戰を交えるためにイティク山を出たあとだった。留守を預るマンギット・タイシャは改めてロシア使節に前年バートゥルらが派遣した使節の意味を説明し、ツァーの援助を求めている。バートゥルらはシベリアを混亂させないことを誓い、ツァーへの恭順の意志を表明している。「ツァーの御手の下に入る」というのは、あくまでかれらの政治的ゼスチュアに過ぎまい。こうした意志を表明することによってロシアの好意

をひきつけ、友好的態度をかち得ることによって、外敵に對處する時に、ロシア側から自らの背後を衝かれないようにするための方策であったように思う。ロシアにとっては、敢て西北モンゴリアの爭いに介入する必要は何もなかったのである。一方カルムックにしても敢てロシアに臣從する必然性もなかったからである。

イティク山を出たバートゥルは軍をイシム河の地に集結した。同二三年六月二八日、カルムックからトゥメニに歸ったカザンのタタル商人ウラズボクタ・ウラズリエフ Уразбохта Уразлиев らのもたらした情報によると、

いまカルマックのタイシャら、つまりバガティリ Багатырь (=バートゥル)、コゼニャク Козеняк、ゼングル Зенгул、ババガ Бабуга、カイカ Кайка、イシム王子 Ишим-царевич[3] はイシム Ишим に遊牧している。一方、カルマックのタイシャ、ウルルク Урлук (=урлюк)、チョクル Чокур はイシムの上流に沿って遊牧している。かれら全タイシャはイルティシュとイシム河間、カムイシュロフ Комышлов に向って集結している。そこに家畜と財産が運んである。かれら全タイシャはムガール人と戰う準備をしている。妻子、家畜、財産はカムイシュロフ Камышлов に留めてある。(док. No. 63)

とあり、カルムック軍が再び全勢力をあげてアルツン・カーンとの決戰に乘出したことを傳えている。カムイシュロフ Комышлов～Камышлов は、イルティシュ河の西岸に注ぐその支流カムイシュロフ河の流域地方とみられる[4]。カルムック軍の作戰は、イシム河とイルティシュ河間のカムイシュロフ地方に集結したバートゥル、チョクル、ウルリュクらの西軍と、チュムシュ河口に據っていたはずのカラクラの率いる東軍が、東西合して、アルツン・カーンに當り、故地イルティシュ上流域地方を回復しようとしたものと考えられる。この作戰は、ロシア側には何も傳えられていないが、おそらくカラクラの指導の下に行われたものとみられる。

マンギット・タイシャのもとから歸還するロシア使節ヴォルコフと共に、マンギット・タイシャはツァーに向けて援助要請の使者を派遣した。使者は同二三年一〇月八日、ウファ經由でモスクワに到着したが、何らみるべき成果を收めなか

った（Док. No. 68）。使者のモスクワ到着をきっかけに、同年末、ツァーは勅令をもって、今後一切カルムック使節とアルツン・カーンの使節のモスクワ入りを嚴禁したのである（參照、一二頁）。モスクワ政府は西北モンゴリアの情勢不穩を察知して、シベリア當局に情勢靜觀を命じたのであった。

この戰いの結果は、ロシア側の右の如き態度の故か、明白なロシア側の記錄が見當らない。ただ翌二四年六月五日、トゥメニ市にカルムック使者が到着し、アルツン・カーンの迫害 утеснение を理由に、ツァーの保護を求めたことを記錄するのみである（Док. No. 69）。この事實は、おそらくカルムック軍が再度非運に見舞われたことを暗示するものであろう。この點、パルラスが

一六二三年にカラクラは再度モンゴルに潰走させられた。[34]

とのべているのは、結論的にみて妥當であろう。

カラクラの再度の非運を最後に、かれとアルツン・カーン、ショーロイ・ウバシ・コンタイジとの爭いは再びロシア文書に現れることがない。否、アルツン・カーンの姿さえしばらくロシア文書には言及されていない。ロシア政府の對モンゴル政策の變化もさることながら、やはり基本的には、カルムック・モンゴル間にこの後小康狀態が維持され、強いてロシア側の注意を惹く出來事に乏しかったからであろう。アルツン・カーンが再びロシア文書に姿を現わすのは、第二代のバドマ・エルデニ・コンタイジ Badma erdeni qong tayiji（俄木布額爾德尼[35]〈Ombu erdeni, Эрдене Алтын-царъ[36]）である。第二代アルツン・カーンが始めてロシア文書に姿を現わすのは一六二九年、ロシア側が得た情報によるものであり[37]、一六三一年九月になって突然アルツン・カーンの急使がトムスク市に來り、チャギル・カーン Чагир-хан の壓迫を恐れて、全オルダをあげてツァーに臣從し、その保護を求めた[38]。ここに始めてモンゴル側の要請によってロシア・モンゴル間の使節往來が再開されることになった。Чагир-хан はチャハル汗 Čaqar qan リンダン Lingdan〈tib. Legs ldan（林丹、靈丹）のことであろう[39]。リンダン汗がアルツン・カーンを壓迫したことを實證する直接の史料は中國側には見當

らないが、事態はおそらく、崩壊に瀕した内モンゴリアを再統一せんとしたリンダン汗の同盟者、カルカのツルグル・ツォクトゥ Čurul čortu、[63] いわゆるツォクトゥ・タイジ Čortu tayiji（綽克圖台吉）[64] とこれに反對するカルカ諸侯間に惹起された內亂に關係があるであろう。[65] アルツン・カーンはこの內亂に卷込まれて、敢てカルムックと爭う餘裕がなくなってしまったのであろうと考えられる。

一方カルムックにおいては、この間を利用して內部の統一に努めなければならないはずであったが、この努力は、一六二五年に起ったズンガル部の內亂という試錬を經過しなければならなかった。次にこの事件についてのべよう。

五

事件は、カラクラの子チン・タイシャ Чин-тайша の遺産をめぐるバイバギシュ・タイシャとチョクル・タイシャ兩兄弟の爭いに發端がある。[66]

一六二五年七月二六日、バートゥルの本營に滿一年の滯在の後、トボリスクに歸ったヤコブ・ブゴラコフ Яков Бугослаков のもたらした情報によると、[67]

春にわたしのもとに次のようなニュースが屆いた。

チョクルとバイバギシュ兩タイシャの兄弟チン・タイシャが死んだ。チョクル・タイシャはかれの家畜と部民を自分のものにして、兄弟のバイバギシュの自由にさせなかった。そこでバイバギシュはやって來て、力づくでチン・タイシャの部民と家畜を奪った。そのためにチョクル・タイシャとバイバギシュの間に不和が生じた。そして戰いになるらしい。そこでタライ・タイシャはこれを聞いて、二人のもとへ和解させに赴いた。一千人を率いて行った。……タライ・タイシャはチョクル・タイシャのもとへ來て、かれらの兄弟チン・タイシャの家畜を等分し、五百人をバイバギシュ・タイシャに、チョクル・タイシャに五百人を渡すつもりだった。そこでバイバギシュはチョクルに五百人を渡そうとし

た。ところがチョクルは一千人全部を得ようとして、カルマックのタイシャら、メルゲン・テメニ Мерген-темень、クヤン Куян、タブイタイ Табытай と集って、バイバギシュを攻めに行った。かれらの兵力は三萬だった。タライ・タイシャはチョクルに加わらず去って、夜、祕かにバイバギシュ・タイシャに、チョクル・タイシャが大擧して汝を攻めに行こうとしているという情報を與えた。だがチョクル・タイシャは鹽湖の近くバイバギシュ・タイシャの所へやって來て、多くの民を殺し、家畜を奪い、殘った者は自分の手中に收めた。そのためにバイバギシュの民は少くなって、皆避難していた。カラクラ・タイシャ Каракул-тайша は、バイバギシュがチョクルに包圍されていると聞いて、チョクルに對するバイバギシュ援助に向った。かれの兵力は一萬だった。そこでチョクルは掠奪しつつ去った。バイバギシュとチョクルとの間に起ったこの後のことは、わたし（＝ヤコブ・ブゴラコフ）は知りません。というのは、タライ・タイシャはわたしをイティクに行かせたからです。

とある。事件の發端、途中の經過については改めて繰返すまでもない。ところで、この事件を傳えたもう一つの報告がある。それは、イティク山にわずか二週間餘りの滯在の後、トボリスクに歸ったコサック騎兵フィリップ・ヴヤトキン Филипп Вяткин らの報告（док. No. 70）である。ヴヤトキンらはイティク山滯在中に、ここに來ていたヤコブ・ブゴラコフに會って、かれからも情報を得、またかれら自身もカルムック人から情報を得た結果であるが、その情報は、短期滯在の結果にすぎないだけに、ブゴラコフ自身の報告の價値に及ばないものがあるが、またブゴラコフの報告を補うものもある。ヴヤトキンらの報告によれば、

わたし達はカルムック人達から次のように聞いた。

タライ・タイシャがチョクル・タイシャの方へ行ったのは、カルマックの地にて、チョクルとバイバギシュ兩タイシャの兄弟、チン・タイシャが死んだためだ。バイバギシュはチン・タイシャの部民一千人全部をその家畜と共に得ようとした。チョクル・タイシャは與えることを望まなかったので、二人の間に爭いが生じた。その後和解ができた。バイ

バギシュはチョクル・タイシャにチン・タイシャの部民六百人を渡し、自分では四百人を受取った。和解の時、カラクラ・タイシャがいた。和解の後、チョクル・タイシャは殘りの部民を奪おうとしたが、バイバギシュ・タイシャはかれに渡さなかった。そこで、そのために二人の間に戰いが始った。チョクル・タイシャはバイバギシュを攻めに行った。かれの兵力は一萬であった。そしてメルゲン・テメニ・タイシャの援助を受けた。メルゲンの兵力は一萬であった。補注① それにタブイタイ Табытай とバトゥトクヤン Батыткуян 兩タイシャの援助を受けた。かれらはカルムック人二千人を率いていた。ところがバイバギシュ・タイシャは兵力二千に過ぎなかった。戰いは鹽湖の近くで行われた。その戰いで、チョクル・タイシャはバイバギシュ・タイシャの兄弟のヤサクル・タイシャ Ясакул-тайша を殺し、また多くの人を殺した。他の者達はバイバギシュのもとから逃亡してしまったので、バイバギシュにはわずかに一千人しか殘らなかった。……そこでカラクラ・タイシャはそれを聞いて、バイバギシュの援助に向った。そしてイルティシュ河の彼岸に陣取った。チョクルとバイバギシュ兩タイシャの間に戰いがあった時、かれらのウルスからムンガールの捕虜達がムンガールに逃げて行った。そこでタライ・タイシャは、ムンガール人の攻擊を危惧して、チョクルとバイバギシュを和解させに行った。

とある。この報告は、チョクル、バイバギシュ間における爭いの調停者としてのタライ・タイシャの役割を全く傳えていない。その代りにカラクラを調停者に持って來ている。その上、ブゴラコフの報告と異って、バイバギシュがチン・タイシャの遺產をそっくり我物にしようとしたことに事件の發端を求めている。そして遺產の分け方も、ブゴラコフとは異ってバイバギシュが四百人、チョクルが六百人を受取ったとしている。これに同意しないチョクルが一千人全部を自分の物にしようとして、兵を起した以後の事件の大筋は兩報告とも大きな差違はない。チョクルが兵を起す前の事件の發端と經過は、ブゴラコフはバートゥルのもとに一年滯在していた實績を考慮し、チョクルがチン・タイシャの遺產を全部我物にしようとしたために、バイバギシュが不服を唱えて、爭いが生じたので、長兄のバートゥルが調停に立ち、二人にチン・

タイシャの遺産を等分する案[68]を出して、爭いを一時收めたが、後にチョクルはチン・タイシャの遺産を全部我物にする氣持を捨てきれず、トルグートのメルゲン・テメネ、バートゥト（巴圖特）のクヤン・タイシャ Батыткуян-тайша〈Bātud Kuyan tayiji らの兵、約三萬（ヴヤトキンらによれば、計二萬二千）の助力を得て、兵力二千のバイバギシュ軍を鹽湖、つまりヤムシ湖の近くで大擊破したために、バートゥルの調停の失敗したのを聞いたカラクラがバイバギシュ援助に乘出したものとみたい。ヴヤトキンらが調停の役をカラクラとみているのは、或はカラクラの意を受けた結果にちがいないタライの調停の役を評價するさいの差でもあろう。カラクラがチョクル連合軍鎭壓に乘出したとき、バートゥルが對モンゴル方面に當ったにちがいないのも父の命令によるものとも考えられる。いずれにしても、バートゥルがこの爭いによって、モンゴルに虛を衝かれないように對處しなければならなかったことは事實であろう。兩報告を通じて、鹽湖、ヤムシ湖が再びカルムックによって回復されていたことが認められる。ヴヤトキンらの報告にいうムンガールの捕虜は、この回復事業の際に得られたものかもしれない。カラクラは、調停がバートゥルの手に負えず、調停遂行のために、バートゥル自身がバイバギシュ援助に乘出さざるをえなくなった事情と、この內亂によって豫想されるモンゴルの奇襲を考慮して、バートゥルをモンゴル對策に當らせ、自らは內亂鎭定に乘出したのではないかとみられる。そしてカラクラは兵一萬を率いて、バイバギシュ援助に向ったのであろう。この後の事件の經過について、ブゴラコフは「知らない」といっているので、次にこの事件のその後を考えてみよう。

一六二五年春に始まったこのズンガル部の內亂はその後永く結着がつかなかった。一六二八年九月二一日、カルムックからトボリスクに歸ったコサック、ブルナシュ・ムロムツォフ Бурнаш Муромцов らの報告によると、

わたし達はカルムックにてチョクルとかれの女婿のウルリュクの子タイチン Тайчин のもとにいた。チョクルとかれの女婿タイチンが一緒に遊牧していたのは、タライ、ウルリュクら他のタイシャ達がチョクルを殺そうとしているからだ。そこでタイチン・タイシャはそのために殺されるのを恐れて、チョクル・タイシャのもとから父のもとへ全ての民

を率いて逃げた。タライ・タイシャと他のタイシャ達は、多くのカルムック人を率いて、チョクルを逃がさず、殺すために赴いた。そこでチョクル・タイシャはイシム河に逃げ、トボル河で越冬するつもりでいる。(Док. No. 72)

とある。チョクルの女婿でウルリュクの子としてみえるタイチンは、西域圖志巻四七雑錄一準噶爾部世系、土爾扈特の條にみえる和鄂爾勒克の子、書庫爾代青 Сүкүr dayicing であろう。この時、タイチンはバートゥル、ウルリュクらがカルムック軍を率いて、チョクルを討とうとしたために、危険を感じて父のもとへ逃げたという。チョクルはイシム河へ逃亡した。この文書において、カラクラに代って、バートゥルがチョクル征伐に向っている。それでは、一六二五年にチョクルを討とうとしたカラクラはどうしたのか。實はロシア文書は一六二五年のブゴラコフらの報告以後、かれの姿を全く傳えていない。ただ想像の及ぶ限りでは、その後カラクラはチョクル征討をバートゥルに委ねて、かれ自らはイルティシュ上流域の地に留まって、カルムック内部の混亂の後片附と宿敵アルツン・カーン對策に專心したのではなかろうか。それ故に、カラクラはロシアの前進基地に接近する機會がなく、從ってロシア側に知られなくなったのではなかろうかとおもう。

さてトボル河で越冬するつもりのチョクルについて、翌一〇月、若干のトゥメニのタタル人達は、すでにトボル河上流のトゥメニから五日行程の黑河 Черная речка の岸で越冬するためにやって來たチョクルに出會っている(Док. No. 73)。チョクルとバイバギシュをめぐるカルムックの爭いは、まもなくチョクルの勝利に終った。戰いの年月がはっきりしないのが殘念だが、少くとも一六三〇年五月までにロシア側がカルムックの捕虜となっていた一ナガイ人から得た情報によると、

わたしはハンデリ・タイシャ Хандерь-Тайша のもとにいたが、その時ここへバイバギシュがやって來たが、かれは戰死し、バイバギシュに代って、その兄弟のチョクル Чекур/чокур がタイシャになった。ここではチョクルとメルゲン・テメニとハンデリ・タイシャが一緒に遊牧している。

とあり、この報告の時期までにバイバギシュは戰死し、チョクル、メルゲン・テメニ連合軍が勝利を握ったことが傳えられている。なおチョクルがバイバギシュに代ってタイシャとなったというのは誤りで、事實は前者が後者のウルスを收めたことを意味するものであろう。

こうして一六二五年に起ったズンガル部の內亂は永く續き、カルムックを大いに混亂させたことは想像に難くない。一六三〇年を最後としてロシア文書にはカルムックの情報について、以後めぼしいものは何一つ傳えていない。次にロシア文書にカルムックについて傳えられているのは、一六三五年、父カラクラに代ってバートゥルがコンタイシャ Контайша ⟨qong tayiji（渾台吉⟩皇太子）と號して、ズンガル部長の地位に登っている事實についてである。それ迄の間、ズンガル部をはじめ、カルムックがいかなる時代の推移を經驗したか、全く想像の外はないが、おそらくこの間にアルツン・カーンが關心をモンゴリアに向けざるをえなかった機會を利用して、カラクラはバートゥルの助けを得て、ズンガル部の再建に努めたであろう。しかしその努力は困難であったであろう。なぜならカラクラ・バートゥルの意に反して、チョクル・タイシャが內亂の勝利者となっていたからである。カラクラがチョクルをどう處遇したか全く不明であるが、少くともバートゥルが父に代って政權を握っていた時期には、バートゥルとチョクルが和解していたことは後の歷史にみる通りである。いずれにしても、ズンガル部の本格的な再建はバートゥルの時代に持越されざるをえなかったのである。

六

カラクラの歿年次を明記した記錄は見當らないようである。ミルラー Миллер は、

一六三五年頃死んだ。[7]

といい、また

一六三五年頃死んだらしい。なぜなら、かれの子で、支配の後繼者バーティル・タイシャ Batir Taischa が同年始め

てコンタイシャ Contaischa と號し、父カラクラはもはや現れないからである。[73]

といい、バートゥルが一六三五年にコンタイシャと號し、以後、カラクラの姿がみえないことを以て、カラクラの死を一六三五年、もしくはその頃とみている。パルラスは、

一六三五年の父 Charachulla の死後、Baatur Taidshi は Dalai=Lama から Chuntaidshi の特許 Patent と Erdeni=Baatur の名を得た。[74]

といい、カラクラの死を一六三五年と斷言している。ロシア文書に始めてコンタイシャの名が現われるのは、既に引用した一六三五年三月三〇日トムスクに歸着したロシア使節に同行したアルツン・カーンの側近ダイン・メルゲン・ランズの使者が齎らしたランズの書簡における次の如き一節においてである。

アルツン・ツァーリは黑カルマックと七年間戰った。わたしはアルツン・ツァーリとカラクラの子コンタイシャを永遠に和睦させた。(ДОК. No. 115)

使節一行がアルツン・カーンの本營ウプサ・ノールを出發したのは、三五年一月一四日のことである。[75] バートゥルはこの時既にコンタイシャの號を帶びている。從ってカラクラはこの時迄に死んでいたことになる。アルツン・カーンの和睦の相手が既にコンタイシャに移っていることは、バートゥルが父に代ってズンガル部の政權を握っていたことを示すものであろう。ランズのいうアルツン・ツァーリは既述のオムボ・エルデニであるが、オムボがカラクラと七年間戰ったという意味は、かれが父ショーロイ・ウバシ・コンタイジを繼いでアルツン・カーンになってから、宿敵カラクラの死す迄七年間あったという意味ではなかろうか。しかし殘念ながら現在の所、オムボがいつ父を繼いだか確定されていないので、[76] この七年間をオムボの襲位から七年後を以ってカラクラの死とも決定できない狀態にある。いずれにしてもカラクラの死によるバートゥルの政權交替は一六三五年一月一四日迄に行われていたことを確認するに今は留めたい。パルラスがいうように、カラクラが一六三五年に死し、その後直ちにバートゥルがダライ・ラマからコンタイジの特許とエルデニ・バート

ゥルの稱號を受けたとするなら、この出來事をわずか二週間内に當てはめなければならないが、これを今確認する材料を持っていない。[補注(2)]

ランズのことばによれば、カラクラの姿がロシア文書にみえなくなる一六二五年以後も、かれの生涯はアルツン・カーンとの戰い、卽ちカルムックをモンゴルの羈絆から解放するために費されたことになる。カラクラの生涯をかけてのその努力は、かれの生前には實を結ばず、一切がその子バートゥルの時代に持越されねばならなくなる。カラクラの晩年は、アルツン・カーンが内外モンゴリア情勢に目を轉じざるをえなかった時期だけに、對外的には比較的穩かだったとみられる。おそらくその間にかれはズンガル内部の統一に懸命の努力を傾けたであろう。しかしその努力も亦かれの生前には實を結ばず、バートゥルに引繼がれざるをえなかった。バートゥルは父を繼ぐと直ちにモンゴルと和平し、西隣カザックに當って大成功を收めた。[7] バートゥルがこの成功を基にして、再び對モンゴル戰に自ら身を投ずる事情は稿を改めて說くことにしたい。

註

(1) P. S. Pallas, Samlungen historischer Nachrichten über die Mongolischen Völkerschaften, St. Petersburg, 1776, Th. I, S. 36.

(2) ibid.

(3) History of Mongols, Part I, London, 1876, p. 614.

(4) 近代支那史。京都。一九二六。p. 65.

(5) 哈喇忽剌と巴圖爾渾台吉（和田博士還曆記念東洋史論叢所收）。東京。一九五一。

(6) オイラット Oyirad（衛拉特）をさす。一七世紀のロシア文書において、オビ Обь 河の西岸、アルタイ山岳地帶に遊牧していたテルート（テレグット）Telūd/Telegūd 族（ロシア文書 Телеут）を白カルマック Белые калмаки と稱するのに對して用いられる。

(7) Erich Haenisch, Eine Urga-Handschrift des Mongolischen Geschichtswerks von Secen Sagang (alias Sanang Secen), Berlin, 1955, (略稱 Urga-Ms.) 59r—59V.

(8) 東亞史研究（蒙古編）。東京。一九五五。p. 351, 774.

(9) Urga-MS., 70r.

(10) 俺答汗の覇業（東亞史研究・蒙古編 pp. 773—74）。

(11) Urga-MS., 70V.

(12) Urga-MS., 72V.

(13) 他答汗の祖業（東亜史研究・蒙古編 p. 789）。

(14) ibid., p. 774.

(15) Шара Тулжи, Монгольская летопись XVII века, M.-L., 1957, стр. 175.

(16) Urga-Ms., 72r—72V.

(17) 蒙古源流にみえるドゥルベン・オイラットは、Čoros (=Jegün γar), Toryaγud>Toryūd, Baγatud>Bātud, Naiman ming-γan qoyid (=Qoyid [Urga-Ms., 24V]), Ögeled (Urga-Ms., 24V 厄魯特) の五部となっている。シラ・トゥージにおいては次の六姓 jiryγan omoγ である（Шара Тулжи, стр. 261—62）。

Dörbed, Üjiyed, Čoros, Qoyid, Baγatud, Kereyid.

この中 Üjiyed はその系譜をみると、明かに Qošūd（和碩特）であり、事實、同書の他の箇所に Qosiγud>Qošūd の名がみえる。（Шара Тулжи, стр. 171.）。但しこの兩者の系譜を檢討すると、Üjiyed 姓の方は部長バイバガス Bayibaγas（拜巴噶斯）の系譜であり、Qosiγud の方は、バイバガスの弟の顧實汗の系譜である。羽田明教授の研究によると、厄魯特 Ögeled は和碩特の古名かとみておられるから（厄魯特考・東方學第十輯）、Üjiyed は Ögeled の訛傳とも考えられる。シラ・トゥージに Üjiyed, Qosiγud 兩名がみえることは、厄魯特（＝和碩特）部長を繼いだ本來厄魯特の拜噶巴斯と、後に青海に移牧した和碩特という新名をもつ顧實汗の兩方の存在を傳えたものと考えられよう。

Dörbed は Čoros と同族と傳えられており（西域圖志卷四七雜錄一、準噶爾部世系）、ウルガ本蒙古源流によれば、一五七四年、ブヤン・バガトゥル・コンタイジ兄弟がドゥルベン・オイラット遠征をしたとき、トゥバカン・カン山でチョロスのバジラ・シゲチン Bajira sigečin をはじめ、ドゥルベート・オトク Dörbed otoγ を討ったことがみえる（Urga-Ms., 72V）。この Dörbed otoγ を後の都爾伯特部とすれば、都爾伯特部は當時チョロス部の屬下であって、チョロス・ウルス（＝トゥメン）の分割部分としてのオトク Otog の關係にあったと考えられる（ウラヂミルツォフ、蒙古社會制度史、邦譯 p. 306）。もっとも dörbed otoγ について、シュミット本をはじめ、オルドス三本はいずれもこれを dörben otoγ に作り、シュミット譯はチョロス部屬の四種族 Vier Stämme と譯んでいる。（I. J. Schmidt, Geschichte der Ost-Mongolen, S. 216, Erdeni-yin Tobči, Mongolian Chronicle (Scripta Mongolica II), Harvard University Press, 1956, Ms. A, 101a; Ms. B, 90a; Ms. C, 196）。おそらくウルガ本が眞實を傳えていると思われる。チョロス部が四種族からなる屬下をもっていたという證據は何もない。いずれにしてもドゥルベートはチョロス部に含めて扱われるべきものである。

Kereyid はトルグートの古名であることはいうまでもない。（Cf. Шара Тулжи, стр. 173）。右の如くすれば、シラ・トゥージにみえるドゥルベン・オイラットは、Čoros, Ögeled＝Qošūd, Bātud, Toryūd, Qoyid の五部であって、これは蒙古源流と完全に一致する。

次にロシア文書にみえるドゥルベン・オイラットの內容は、

一七三三年、カルマック калмаки に派遣されたロシア使節ワシリー・ヴォルコフ Василий Волков の報告 (док. No. 64) によると、われわれがカルマックのマンギット・タイシャ Maнгит-тайша から聞いたことばの中に、

三〇のウルスの全ドゥルベンのタイシャ達 все дюрбенские тайши 30ти улусов。

とあり、また、

ドゥルベン・ウルスのタイシャ達、即ちコショウト Кошоут、チュンガル Чунгар、トルゴウルト Торгоурт、バートゥト Батут、クユト Куют のタイシャ達。

とあり、ドゥルベン・ウルスの内容を示す Кошоут、Чунгар、Торгоурт、Батут、Куют はそれぞれ Qošūd, Jūn γar, Torγūd, Bātud, Qoyid の訛音であることは疑いなかろう。ドゥルベン・ウルス дюрбенские улусы とは、オイラットの形容詞、ときにはその代名詞として使用される四萬戸 Dörben tümen ulus をさすものであろう。ドゥルベン・オイラットが右の如き五部からなっていたとすれば、蒙古源流、シラ・トゥージと一致することになる。但しロシア文書ではドゥルベン・ウルスが三〇のウルスからなっていたというが、後者の場合のウルスは、ウルスまたはトゥメンの分割部分としてのオトクの意味であろうか。

(18) Pallas, op. cit., S. 36.

(19) Г. Гомбоев, История Убаши-хунтайджия и его войны с Ойратами (текст и перевод) (Труды ВОРАО, ч. VI, Спб., 1858;) стр. 205.

(20) шара Туджи, стр. 237.

(21) ibid., перевод, стр. 165.

(22) (I) 一六〇八―〇九年、イワン・ベロゴーロフ Иван Белоголов の使節行 (док. No. 6)。

(II) 一六一六―一七年、ワシリー・トゥメニェツ Василий Тюменец とイワン・ペトロフ Иван Петров の使節行 (док. No. 20, 22)。

(23) тайша<mo. tayiji (台吉).

(24) Cf G. F. Müller, Sammlung Russischer Geschichte, St. Petersburg, 8. Band, 1763, 8, 9. Buch.

J. E. Fischer, Sibirische Geschichte von der Entdeckung Sibiriens bis auf die Eroberung dieses Lands durch die russische Waffen, St. Petersburg, 1. Th, 1768.

J. F. Baddeley, Russia, Mongolia and China, London, Vol. II, 1919. pp. 34, 46—62.

Н. П. Шастина, «Алтын-ханы западной Монголии в XVII в.» в сб. «Советское востоковедение», т. VI, 1949 (未見).

矢野仁一「近代蒙古史研究」京都、一九二五、pp. 26—27.

(25) Шара Туджи, стр. 237. 欽定外藩蒙古回部王公表傳卷六一傳四五喀爾喀扎薩克圖汗部總傳。

(26) док. No. 22.

(27) док. No. 2. Howorth, op. cit., Part I, p. 616.

(28) アルツン・カーン領の宗教は、イワン・ペトロフの報告によれば、イスラム教 бусурманская вера であるとみえるが、その

報告の内容をみれば、明かにラマ教である。例えば、ペトロフらはイスラム教の聖人はチベットから來たクトゥクタкутухта であるといっている（док. No. 20）。кутухта は明かに mo. qutuγtu（胡土克圖＝聖者）であり、高位のラマ僧の尊稱である。アルツン・カーンが一六一九年にモスクワに派遣した使者タルカン・ラバ Тархан-лаба は、その名の示す通り blama 喇嘛僧である。讀書き、言語はもちろんモンゴル語であるから、シナ人を文字通りの中國人と同一視することはできない。たとえこれを中國領内に入っていたモンゴル人を指すとしても、當時の政治情勢からいって、それらモンゴル人が西北モンゴリアに入っていたとは考えられない。ましてヤサクをとりに來ていたという事實からすれば、これを扎薩克圖汗部の民と考えるのが穩當であろう。

(29) док. No. 41, 45；カラクラの使者オヌタイ Онутай（док. No. 41）＝アヌチャイ Анучай（док. No. 45）ら三人は、アルツン・カーンの使者タルカン・ラバと一緒にツァーの接見を得たことになっている（док. No. 41）。オヌタイらカルムック使節がモスクワを出發したのは二〇年六月二三日のことであった（МИРМО, стр. 311, прим. 53）。

(30) док. No. 43；一六二〇年五月六日附、ツァー、ミハイル・フョードロヴィチのアルツン・カーン宛の勅書。

(31) док. No. 42；一六二〇年四月二四日附、ツァー、ミハイル・フョードロヴィチのアルツン・カーン宛の勅書。

(32) док. No. 45；一六二〇年五月二五日附、ツァー、ミハイル・フョードロヴィチのカラクラ宛の勅書。

(33) док. No. 44；一六二〇年五月七日附。

(34) ロシア政府がカルムックとの交渉斷絶をカラクラとアルツン・カーンとの決戰がすでに濟んだ一六二三年に決定しているのは、カルムック勢力が、モンゴル國のような統一政權とは異って、分散勢力であったために、それほど脅威を感じていなかったからであろう。ロシア政府としては、敗北のカルムック軍がロシアの前進基地を混亂させることを恐れたにすぎない。

(35) 本稿では、острог をシチェログロフ著・吉村柳里譯「シベリア年代史」（東京。一九四三）に從って〝城塞村〟と譯す。吉村氏の説明によれば、острог とは

コサックが異民族を征服しつつ建設せる城塞を兼ねし村である。武裝されている點は城塞であるが、移民せられている點は單なる城塞でなく一種の村である。即ち武裝村、或は城塞村である。（例言、一六頁）

(36) 西域同文志卷七天山北路準噶爾部人名一、綽羅斯衛拉特屬一。

(37) 註(30)、(32)

(38) パルラスは、この戰いについて簡潔に次のように傳えている。

カラクラは一六二〇年にモンゴルのハンに遠征をした。兵四千を以てハンの本營を襲い、多くの俘獲を得た。だがモンゴルはきわめて敏速にかれを逆襲したので、かれは徹底的な敗北を喫した。のみならず妻子を見捨ざるをえなかった。そして一子をつれて逃れ、一六二一年にオビ河に到り、モンゴルを恐れてチュムシュ河口に堡壘を廻らさんとした。（Pallas, op. cit., S. 37）

(39) МИРМО, стр. 311, прим. 60；История Казахской ССР,

т. 1, Алма-Ата. 1957, стр. 175. に二八年夜とするが従えない。

(40) イティク山の位置については、一六一六年、トボリスクよりイシム河流域探査のため派遣されたトボリスクのコサック、ドミトリー・チェルカーソフ Дмитрий Черкасов らの報告によると、かれらは、トボリスクからイシム河沿岸の地ベローエ・ガロディーシチェ Белое Городище "白い砂洲" まで往復三週間と二日を要し、ベローエ・ガロディーシチェからイシム河を遡ってイティク Итык 山まで眞直ぐに騎馬で片道八日行程であることを明かにしている（док. No. 16）。従ってトボリスクからイティク山まで片道凡そ二〇日行程ということになり、二〇年九月、トボリスクに來たバートゥルの使者ブガラの要したイティク山からトボリスクまでの日數とほぼ一致する。イティク山がイシム河下流沿岸の地にあったことは明かであろう。

(41) док. No. 56；

アルツン・ツァーリはカザックの地と、カザック人はナガイと協約していた слажился。

實際上、アルツン・カーン領とカザック領との地理的位置からいって、この兩者が連絡をとることはまず考えられない。事實は、おそらく、カザックがアルツン・ツァーリのカルムック攻撃に乘じて、カルムック攻撃に乘出したために、ロシア側に右のように受取られたのではあるまいか。カザックとナガイとの關係については十分に考えられるが、今確認する材料を持たない。

(42) 西域同文志卷九天山北路準噶爾部人名三、都爾伯特衙拉特屬。

(43) Pallas, op. cit., S. 47；パルラスは Tayiši（太師）を Tayiji（台吉）に誤っている。ただしロシア文書では、兩者いずれも Тайша で表される。

(44) Шара Туджи, стр. 262.

(45) док. No. 58.

(46) Там же.

(47) док. No. 59.

(48) 例えば、二二年秋、カルムックのセングル・タイシャ Сенгур-тайша なる者はウフィンスク Уфинск 地方を攻撃し、バシュキール人の村落を破壊している（док. No. 60）。

(49) トルグート Torγūd（土爾扈特）部の酋長。一六一六年にバートゥルの本營を訪れたトミロ・ベトロフらの報告によれば、ウルリュク・タイシャはバートゥルの弟チョクルと共にバートゥルの内政顧問 думчие ближние тайши (Baddeley はこの語を the chief counsellors と譯している。Baddeley, Russia, Mongolia and China, London, Vol. II, 1919, p. 38) であったと傳えられている（док. No. 18）。一見信じがたいが、この頃のロシア文書には、ウルリュクがバートゥルと住牧地を共にしていたらしい事實、およびパルラスによれば、バートゥルの妻の一人にウルリュクの娘ダラ・ウバ・サルチャ Dara Uba Saltscha があったという事實 (Pallas, op. cit., S. 39) から、ベトロフらの觀察に誤りなしとはしないが、必ずしも信じがたいものとして退けることはできない。

(50) 參照、註(36)

(51) док. No. 64；ヴォルコフは二三年四月二三日、ウファを出發

し、同年五月二九日にイティク山に到着している。

(52) マンギット・タイシャはバートゥル・タイジの兄弟と傳えられているが、かれの名は、西域同文志をはじめ、中國側史料には全くみえない。

(53) док. No. 64.

(54) Ишим-царевич は、シベリア汗國 Сибирское ханство の最後の汗、クチュム Кучум の子。一六世紀後半を通じてオビ河とその支流イルティシュ河の合流點附近に根據し、ジュチ（朮赤）の子孫と稱し、カザン Казан 以東の廣大な地方に據ってシベリア征服を志していたシベリア汗國が世紀末のいわゆるエルマックの東征によって瓦解し、一六〇七年、最後のシベリア汗クチュムの諸子はロシア軍の壓迫を逃れて各地に分散した。クチュムの子イシムはこの時トルグート部のウルリュクのもとに賴った。一六〇八年一月一二日附のタラ軍政官シーラ・ガガーリン Сила Гагарин の報告によれば、クチュムの兄弟の中、イシムは、

> イシム Ишим はカルマックの自分の妻の父ウルリュク・タイシャのもとへ逃げた。(док. No. 3)

とあり、ウルリュクはイシム王子の岳父であったことがわかる。この點バッデレーが、イシムは一六二一年、もしくはその頃トルグートのホ・ウルリュクの娘と結婚したといっているのは (Baddeley, op. cit, Vol. II, p. 64)、年代上誤っている。(cf, H. Howorth, History of Mongols, Part II, pp. 1001—1002)。イシム王子がウルリュクに身を寄せたのは右の事實に基づいている。一六一六年にバートゥルを訪ねたペトロフらは、バートゥルの内政顧問をしていたウルリュクと共に、バートゥルの本營にいたイシム王子と會っている (док. No. 18)。

(55) МИРМО, стр. 341.

(56) Pallas, op. cit., S. 37, МИРМО, стр. 301, ф. Портфели Миллера, No. 279.

(57) Шара Туджи, стр. 251；ショーロイ・ウバシ・コンタイジの子である。

(58) 欽定外藩蒙古回部王公表傳卷六一傳四五、喀爾喀扎薩克國汗部總傳。

(59) док. No. 109.

(60) док. No. 75；この文書において、アルツン・ツァーリはドゥチュン・カーン Дючюн-хан の攻撃を蒙っているというロシア・コサック兵の情報がのせられている。Дючюн-хан はシャスティナ Шастина 氏の比定する如く、Dörin mongyol-un qan《四〇モンゴルの汗 хан сорока монголов》（即ち、四〇モンゴル・トゥメンの汗 хан сорока монгольских туменов）を指し、明かにチャハルのリンダン汗のことである (Н. П. Шастина, Русско-Монгольские Посольские Отношения XVII века, Москва, стр. 32—33.)。

(61) док. No. 84.

(62) Шастина, op. cit., стр. 32—33.

(63) Шара Туджи, стр. 246.

(64) 欽定外藩蒙古回部王公表傳卷三四傳一八、烏珠穆沁部總傳。

(65) Шастина, op. cit., стр. 32—33, А. Позднеев, Материалы для Истории Халхи с 1636— по 1736 г. СПб, 1883, стр.

116.

(66) チョクル・タイシャは既出の Cükür（楚庫爾）であるが、バイバギシュ、チン・タイシャ両人は中國資料に全く見えない。しかし、パルラスのズンガル世系表（Pallas, op. cit., Stammtafel II）によれば、バートゥル・タイジの兄弟に Baibegusch, Tschin Taidshi 兩兄弟の名が見え、その齒行關係は、Schüker, Baibegusch, Tchin Taidshi の順である。この系譜はミルラーも全く同樣であるし（МИРМО, стр. 302, ф. Портфели Миллера, No. 279）、Sammlung Russischer Geschichte, т. 8. S. 369 においては、「一六二五年の Tschin Taischa の死に際して、その遺民一萬人をめぐって、Tschokur, Baibagisch 兩兄弟が戰って、後者が敗れた。」とのべている。なおパルラスによれば、Baibegusch は「一六二五年、Schüker Taidshi と爭った。」とあり、Tschin Taidshi については、「一六二五年死。」（Pallas, loc. cit.）とあって、兩人の存在はもちろん、事件そのものを傳えている。なおミルラーによれば、「Чин-тайша は一六二五年に死し、部民一萬人を遺す。」（Миллер, loc. cit.）とあるが、一萬人はおそらく一千人の誤りであろう。

(67) Док. No. 70；ヤコブ・ブゴラコフはトボリスクより一六二四年七月六日にバートゥルのもとへカルムック人捕虜護送のために派遣されたものである。かれはトボリスクより四週間を要してカザックの境界に近いアルブリ・カメニ Арбулъ Каменъ でバートゥルに會っている。アルブリ・カメニの位置ははっきりしないが、トボリスクより一月行程のイティク山とそれ程離れていない地點とみられる。バートゥルがバイバギシュ、チョクル兩兄弟の爭いを調停するために赴いている間、ブゴラコフはバートゥルの命によってイティク山に待っていたのである。

(68) チョクルがバイバギシュの兄であったという點からすれば、前者に六百人、後者に四百人という數は常識的にみて無理がないが、はたしてそう理解していいか自信がないので、ブゴラコフの報告に一應從っておきたい。

(69) ミルラーは、この時のタライをデルベート部のダライ・タイシ Dalai tayiši（達賴台什）と受取っているようである。かれはそのズンガル世系表において、チョクルの略傳をのべた中で、チョクルは、

一六二八年に、デルベン Дербен のオルダのタイシャ・タライ taïša Талай とテルゲット Teprer のオルダのウルク Урлук と爭って、トボル河に去った。（МИРМО, стр. 302, ф. Портфели Миллера, No. 279）

といっている。Дербен, Teprer はいずれも、dörbed, torγud の誤りであろうが、この記事は、ムロムツォフの報告に基づいて書かれたものであろう。しかし、わたしは、既に指摘したように、ズンガルのバートゥルがトルグートのホ・ウルリュクの女婿であったという事實、及びこの兩者が親密な關係にあった事實を傳えるトミロ・ペトロフの報告によって、ムロムツォフの報告中のタライをズンガル部のダ（タ）ライ・ボガティル、つまりバートゥル・タイジと考えたい。ウルリュクの子タイチンも亦チョクルの女婿であったというから、トルグート部とズ

ンガル部は常に姻戚關係にあったとみられる。假にこの時のタライをミルラーに一歩讓って、デルベート部のそれとみても、チョクル征討にバートゥルが加わっていなかったはずはない。

(70) Док. No. 77；この文書自體には、情報をもたらしたナガイ人がいつまでハンデリ・タイシャのもとにいたかを推定させる材料を缺く。文書が作られたのは МИРМО の編者が他の史料に基づいて推定した結果によって、一六三〇年五月二五日より以前のものである (МИРМО, стр. 150, примечание)。バイバギシュの敗死が、一六二八年一〇月からこの間にあることは自明である。

(71) МИРМО, стр. 301, ф. Портфели Миллера, No. 279.

(72) G.F. Müller, Sammlung Russischer Geschichte, St. Petersburg, 8 Band, 1763, S. 368.

(73) Pallas, op. cit., S. 39.

(74) Док. No. 102.

(75) シャスティナ氏によれば、ショーロイ・ウバシ・コンタイジの歿年を確定することはできないが、一六二〇年代の末にあったことは明かであるとされているにすぎない。(Шастина, op. cit., стр. 55)。俄木布額爾德尼について中國史料の傳える所は、順治七年（一六五〇）、俄木布額爾德尼が行獵と詭稱して、歸化城界に侵入したこと。順治一二年（一六五五）、喀爾喀左右翼に八扎薩克が設けられたとき、俄木布額爾德尼が右翼扎薩克の一人になったことがのべられているにすぎない（欽定外藩蒙古回部王公表傳卷六一傳四五、喀爾喀扎薩克圖汗部總傳）。

(76) ミルラーはバートゥルの略傳をのべて、（バートゥルは）一六三四年、再びブハーラ人と爭った。この戰いで大損害を蒙ったが、まもなく大勝利を得て、ブハーラ汗イシム Ишим の子ヤンギル Янгир を捕虜にした。(МИРМО, стр. 301, ф. Портфели Миллера, No. 279)

といい、パルラスはこの說に從って、

かれ（バートゥル）はモンゴルと和解した後、一六三四年に二度目に勝利を得ることのできたブハーラとの幸運な戰いによって豐かになった。(Pallas, op. cit., S. 39)

とのべている。もっともミルラー自身は、Sammlung Russischer Geschichte, Band. 8, S. 373 において、バートゥルがカザック汗イシム Ischim と戰って、その子ヤンギル Jangir を捕虜にした事件を一六三五年としている。ロシア文書にはこの事件の詳細を傳えたものがあり、それによれば、バートゥルがカザック大オルダのイシム汗 Ишим-царь と戰って一度敗北を喫したのが一六三五年春のことであり、二度目に勝利を得てイシムの子ヤンギル王子 царевич Янгыр を捕虜にしたのが同年夏のことである (Док. 123, 124)。この戰いの詳細については別稿にゆずるが、事件の事實は、パルラスとは異って、バートゥルが一六三五年一月一四日迄にモンゴルと和睦した後カザック遠征に赴いたことである。パルラス、ミルラーのいうブハーラとは西トルキスタンを意味する大ブハーラ、この場合カザックのことである。

補註①メルゲン・テメネ（ニ）が一萬の軍隊を有していたことは、ジクメ・ナムカ著・橋本光寶譯「蒙古喇嘛教史」（東京。一九二七）p. 263. にも次のようにみえる。

メルゲン・テベナ Mer-gen-the-pe-na（＜Mergen temene）と名づくる者あり。財物を圖滿し、一萬の軍隊を有する一將軍なり。

補注②以上の點からすれば、カラクラの死を一六三四年に求める見解も成立つ。佐口透氏はカラクラの死を一六三四年としておられる。（アジア歷史事典「ジューンガル」の項）。また История Казахской ССР, стр. 179. においては、バートゥルの政權擔當の年は一六三四年となっている。しかしいずれもその根據は示されていない。確かに一六三四年說も充分考えられるが、わたしとしては目下の所、カラクラの死は一六三五年一月一四日までには事實であったことを指摘するに止めたい。

（附記）本稿は修士論文「ズンガル王國勃興史の研究」の一部分である。御指導を賜った田村、羽田兩敎授に厚く謝意を表したい。

東洋史研究叢刊之十一

宋史職官志索引

佐伯富編

體裁總クロース製　A5　本文四二三頁
宮崎市定・宋代官制序說　六三頁
字劃索引　一一頁　定價　二五〇〇圓

本索引は、宋史職官志に含まれる官職・書吏・年號・地名・官制・經濟・財政用語、その他、あらゆる事項についての約三萬數千に及ぶカードを、五十音順に排列したものである。卷頭には、宮崎市定博士の「宋代官制序說」を解題として揭載し、兩々相俟って、宋代は勿論、中國の政治・經濟・社會・官制の研究者には、多大の便宜を與えるであろう。

右書御希望の方は本會までお申込み下さい。

（國內送料は本會が負擔します。）

京都市左京區吉田本町　京都大學文學部內
東洋史研究會
振替京都三七二八番